

「シューカツ！」

石田衣良／著

文藝春秋 2008年 10月発行

2階一般開架図書 (請求記号：F / イタ)

最近、企業の“人員削減”や“内定取り消し”といったニュースをよく耳にします。現在、就職活動中の学生にとっては、雇用情勢悪化の影響で今後の就職に不安を募らせているだろうし、初めて行う就職活動に戸惑いがある学生も少なくないでしょう。

そこで今回は、就職活動に奮闘する大学生を主人公にした小説を紹介します。これから就職活動に取り組む学生にも就活の心構えやイメージを掴むにはとても参考になると思います。

主人公たちは、仲良しグループで就活チームの結成し、チーム全員で内定獲得を目指して就職活動を始めますが、その中で様々な試練に立ち向かっていきながら、仕事をすることを体感し、人間として成長していく姿が描かれている。

働くってどういうことか、壁にぶつかりながら、失敗もしながら気づいていく…

“仕事のやりがい・楽しさ”

そして、就活＝生きること！

「就活は、その人がもつすべての力が試される。社会に出て働くってことは、それをずっと試されていくんだ。」

就活は、まさに人生そのものなのである

なお、県立図書館で「就活支援セミナー」(1月10日)や「就労・再チャレンジ学習相談」(1月10日、1月24日、2月14日、2月28日)を実施します。

ぜひご参加ください！

「忘れがたみ」

安岡 章太郎 / 著

世界文化社 1999年 4月発行

2階一般開架図書 (請求記号：914.6-ヤス)

いかにして若さを保つか、ということは、世の人の大きな関心事の一つであるらしい。このことは若さ＝よい、老い＝わるい、という人々の常識の裏返しだともいえる。でも、本当にそうだろうか。勿論、年を取ることは数多くの負の要素を含んでいる。しかし他方では、年を重ねることがその人の味わいとなり、その言葉に深みを与えることもある。年輪を重ねた作家の綴る随筆は、やはり味わい深い。

父母の思い出、戦前戦中の学生たちの姿、若き文士たちの横顔。安岡章太郎の語るそれらは、その一つ一つがかけがえのない愛すべきものとして、読む者の前に浮かび上がる。まさに人生に裏打ちされた味わい深い一冊である。

たとえばこんな一節にでくわした時、日々の泡立ちの中で無闇にもがいている自分を、ふと優しい目で見られるのではなからうか。以下、少し長くなるが引用すると、

「私が、自分と心の中で出会ったのは、親が死んだり、大病をしたり、戦争にまけたり、そんな大変な時に限られている。大体、日常生活が無事にいとまなまれているときは、忙しくて自分と出会っているヒマなどあるわけがない。」

ううむ・・・。こんなセリフ、なかなか若造には言えるものではない。やはり年をとるのはいい！

